

大学

濱田悦子教授が秋の叙勲にて「瑞宝双光章(保健衛生功労)」を受章

11月3日付けで内閣府より発令された令和5年秋の叙勲にて、本学保健医療技術学部で教授職、大学院保健医療科学研究科で委員長を務めている濱田悦子教授が「瑞宝双光章(保健衛生功労)」を受章しました。

叙勲は、春と秋の年2回行われており、国家又は公共に対し功労のあった方、社会の各分野において優れた行いのあった方などを国が表彰する制度です。その中でも瑞宝章は、公務等に長年にわたり従事し、功績を残した方に授与されるものです。

濱田教授の専門は、臨床検査医学全般・血液疾患の検査医学的研究・血管内凝固亢進・臨床検査結果を応用した各種病態メカニズムの解明で、長年、病院で臨床検査技師として従事し、現場での臨床検査技師の育成及び浜松医科大学医学部附属病院での検査部臨床検査技師長として勤められた経験などが評価され、今回の受章に至りました。

濱田教授は、浜松医科大学医学部附属病院を退職後、前職での経験を生かして臨床現場に役立つ「臨床検査技師」を教育現場で育てたいと、現在本学及び大学院にて、主に血液学・血液検査学・臨床検査医学の授業で教鞭を執っています。血液疾患の検査医学的研究・血管内凝固亢進・臨床検査結果を応用した各種病態メカニズムの解明および検査法の開発を主な研究テーマとしています。

濱田悦子 研究科委員長・教授コメント

前職における臨床検査技師経験が評価され、大変光栄に思います。思えば臨床検査が、用手法から自動化に移行する時期に在職したことから、新規検査法および検査機器の開発、技師教育制度の構築、ISO 15189取得などに加え、地域医療拠点としての責務など、沢山の貴重な経験ができました。本学では現場の知識と経験を後進に伝えていきたいと思っています。



学院

2023 JICA課題別研修の受託契約を締結 6か国からの研修員の受け入れ・シンポジウムを実施

中高での受け入れプログラム・シンポジウムでの生徒発表内容などの詳細はコチラ(中高HP)



1～3日目



4日目～シンポジウム

本学院は独立行政法人国際協力機構(以下、JICA)と2023年度課題別研修「全人的教育：日本の実践的なアプローチ」の受託契約を締結しました。

本研修は、開発途上国から研修員として参加する教育省・地方教育機関の職員に対し、日本の学校現場における非認知能力を含めた児童生徒全体を育てる取り組みを学ぶ機会を提供し、自国で全人的な枠組みから教育できるようにアクションプランの策定を支援することを目的としています。

10月2日～6日、併設中学校・高等学校で、6か国(マレーシア・モンゴル・パレスチナ・エジプト・南アフリカ共和国・マダガスカル)からのJICA研修員6名の受け入れプログラムが実施されました。朝礼やホームルームをはじめ、様々な科目の授業や茶道・華道を通じた礼法の実習、給食、部活動などの視察、掃除(クラス、パレー部と早朝の学校周辺の掃除)も体験。また、探究や食育などの特別授業、キャリア教育のワークショップも行われました。さらに、本校の教育提携校であるアオバジャパン・インターナショナルスクールを訪問した際は、アフタースクールプログラムの見学にも参加しました。

10月7日には、大学の本郷キャンパスにて、公開シンポジウム『日本の教育 何が諸外国の関心を惹くのか?』が開催され、研修員による「日本の教育を参考にして自国の社会課題と向き合う」をテーマにした発表が行われました。また、併設校生徒3名(中3)も、英語での挨拶と、「JICA研修員を受け入れて学んだこと」をテーマに発表を行いました。

その後の期間では、本学併設幼稚園をはじめ、国内の保育園・幼稚園・小中学校などを訪問・視察し、10月13日、再び本郷キャンパスにて、本研修の修了式が執り行われました。修了式当日は、研修員による最終発表と修了証書の授与が行われ、約2週間にわたる日本での課題別研修が幕を閉じました。

今回の研修員受け入れを通して、本校の教職員や生徒にとっても、日本(自校)の教育の良さを再認識する貴重な機会となりました。



教室清掃を行った本校生徒と研修員



華道実習を体験する研修員たち



研修員による自国紹介



シンポジウムで発表を行う生徒たち



修了式での研修員と関係者

GREEN SPIRITS



創立100周年に向かって

法人事務局長
橋本博幸

本年4月より、法人事務局長を拝命致しております橋本と申します。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

さて、ご高承の通り、来年2024年に学院創立100周年を迎えます。よく企業の寿命は50年などと申しますが、100年存続となるとその確率は0.03%、即ち10,000社に3社ということになります。教育機関と一般事業法人とを同列に論じることは適当ではないかも

しれません。然しながら、大正年間に島田裁縫伝習所として、創立者島田依史子先生の強い信念の元で産声を上げた私ども文京学院が、戦前戦後の混乱期、高度成長期、更にはバブル崩壊等々、様々な昭和・平成・令和の時代を乗り越えて発展を続けていることの重みを改めて実感しているところです。

この100周年にあたり、学院では様々な記念事業を計画しております。1. 島田依史子先生が創立時に何を思い、どのような社会を目指していたのかをみんなで考えて社会に発信すること、2. 教育機関として100年にわたりご縁をいただいた多くの関係者の皆様への感謝の意を表すること、3. 100周年を新たなスタートと捉え、不透明な時代だからこそ、今後の未来へどのように発展させていくのか、チャレンジし続けることへの決意表明とすること、の3点を目的として進めているものです。

以上の想いを込めて、キャッチフレーズは「あなたと共

に未来を紡ぐ～Change, Challenge, Continuity～」と決めました。

単なる節目ではなく、100年の誇りを胸に、多くの卒業生、諸先輩から、現役の園児・生徒・学生、そして教職員全員等々、文京ファミリー全員による世代を超えた大きな喜びの場、交流の場、新たな未来への発信の場とできるよう、精一杯努めてまいります。

そのためのメイン企画として島田依史子先生の『私の歩んだ道』の一般書籍化及び映画化プロジェクトを進めております。映画につきましては「教育は人生を楽しむもの」をコンセプトにエンターテインメント性も備えたワクワクする内容を目指し、劇場公開も予定しているところです。

学院HPでも100周年記念サイトをオープンいたしました。サイト内容もアップデートしていきますが、この学院紙においても、どんどんその進捗をお知らせしていきますのでご期待くださいませ。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

大学

文京祭・あやめ祭開催

10月21日・22日の2日間、文京祭（本郷キャンパス）・あやめ祭（ふじみ野キャンパス）が対面で開催されました。この3年間はコロナ禍の影響でオンライン開催や規模の縮小などを余儀なくされてきましたが、今年は両キャンパス共に「完全復活」となりました。

本郷キャンパスでは、「祭高な瞬間を！」をテーマに、音楽・芸人ライブイベントや部活動発表をはじめ、岐阜聖徳学園大学よさこいチーム「柳」による特別ゲスト演舞、進学相談会やゼミナール・プロジェクト関連の展示、こども向けプログラムや各種体験ブースなど様々な企画が行われ、2,145名（昨年：910名）の来場者が訪れました。

ふじみ野キャンパスでは、「Reborn～あやめ祭の再構築～」をテーマに、マッスルプロジェクトのステージ発表をはじめ、各部活動・サークル団体による公演や演奏など、さらにタレント・板垣李光人氏によるトークショー、ヒーローショーなど幅広い企画が行われ、2,043名（昨年：約890名）の来場者が訪れました。

また、文京祭と同日開催で、声優の福山潤氏をMCに迎えたエスカレーター安全利用に関するシンポジウムや、福祉医療マネジメント公開講座『医療機関における経営戦略と看護師・ソーシャルワーカーの連携』と専門職大学院「福祉医療マネジメント研究科」の入試説明会も実施されました。さらに、来年の学院創立100周年に向けて、両キャンパスでは、懐かしい同窓生・先生方との交流を深めるきっかけづくりを目的とし、卒業生の皆さまを母校にお迎えする「ホームカミングデー」や「ゼミ同窓会」も開催され、大学の歴史振り返るパネルや過去の卒業アルバムを見ながら思い出話に花を咲かせるなど、大盛り上りの大学祭となりました。

企画から実施まで担当した、文京祭実行委員会とあやめ祭実行委員会の学生からは以下のコメントが寄せられています。

文京祭（本郷キャンパス）

◆文京祭実行委員長 茂内美紀（経営学部3年）

大学祭の2日間開催は不安も大きかったですが、大盛況となり、無事に成功することができて嬉しく思います。幹部も局員も、新型コロナウイルスの影響により、対面での大学祭を経験していない学生もいるため、良い思い出になったと思います。私は、文京祭実行委員会に入って幸せな3年間でした。

◆イベント局 模擬店部長 野秋実玖（外国語学部3年）

模擬店では 4年振りに各団体にメニュー考案から行ってもらいました。様々な問題にも直面しましたが、その都度幹部のみんなや支援の方々と協議を重ね、臨機応変に対応することができました。お陰様で、2日間とも想像を超える大盛況に終わりました。この経験を今後にも活かしていきたいです。

◆イベント局 イベント部長 荒川凜佳（外国語学部3年）

コロナ禍で交流のできなかった岐阜聖徳学園大学のよさこいチーム「柳」の皆さんを招待し、よさこいパフォーマンスをしていただきました。初めての経験で、不安な面や上手くない場面もありましたが、サポートくださった皆様のお陰で無事成功することができました。とても盛り上がった大学祭となり、嬉しかったです。

あやめ祭（ふじみ野キャンパス）

◆あやめ祭実行委員長 吉原侑希（人間学部3年）

今年度のテーマの通り、あやめ祭の再構築に向けて、コロナ収束後の新たなあやめ祭の形となるものを作れたらいいなと考えながら活動しました。学内のポスター掲示やSNSでの宣伝を積極的に行い、本学の学生やたくさんの方々の来場者の皆様楽しんでいただくことができました。ぜひ来年度のあやめ祭も楽しみにしてほしいです！

◆WEB・広報・渉外局長 小早川武史（人間学部2年）

企業や本学同窓会など、学外への情報発信や連絡がメインの役割でした。ビジネスメールのやり取りが多く、学生時代には滅多にできない経験をすることができました。実行委員のメンバーや職員の方々の協力も得ながら活動したこの経験を、社会に出てから活かせるよう努力していきたいです。

◆制作局長 赤川もえ（人間学部2年）

自らの発想を自由に表現することの楽しさを知った反面、責任を持ち、人を引っ張っていくことの大変さも痛感しました。当日は装飾をお褒めいただき、達成感を味わうことができました。制作局は単に飾り付けをする担当ではなく、装飾を通して大学祭の雰囲気を作り、盛り上げるために不可欠な役割だと誇りを持って取り組みました。今後とも盛り上げていきたいです！

Photo Gallery

文京祭

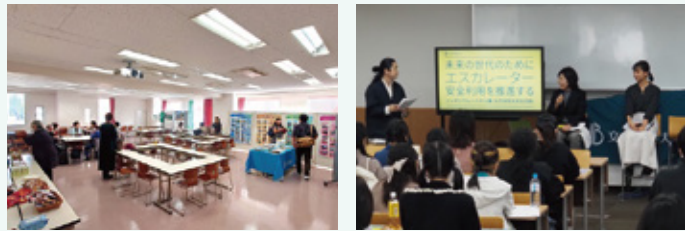
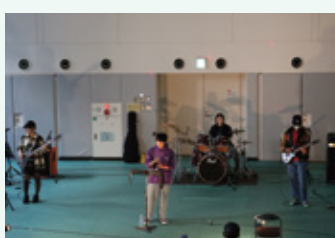


Photo Gallery

あやめ祭



中高

文女祭開催

10月28日・29日、駒込キャンパスでは「文女祭」が開催されました。今年のテーマは「時代」。中学・高校とも、2日間の開催期間を通して、展示や映像など個性あふれる様々な企画が実施されました。

中学

今年は家族・受験生だけではなく、3年ぶりに一般の方にも文女祭に参加してもらうことができ、来校者参加型企画や探究発表、学習展示、部活動発表にも更に力が入りました。中学生実行委員で運営したお祭り企画も大好評で、緑日をイメージした「ヨーヨー・スーパーボールすくい」、「ペットボトルボウリング」、「輪投げ」は大盛況となりました。また、各教室に設定した「フォトスポット」では笑顔いっぱい写真撮影をしていました。

中学生全員で文女祭準備をして、当日は家族や受験生、一般の方からの笑顔での「ありがとうございました！」の声に喜びが溢れていました。

以下、中学生徒会長長畠山礼佳さん(3菊)のコメントをご紹介します。

「新型コロナウイルスの厳しい制限が少しずつ解除され、落ち着いてきました。しかし、昨年よりも多くの方が来校するため、文京学院生や来校者の方が楽しむためにはどうしたら良いのか、どのくらいの量が必要なのか、などたくさん話し合い、校長先生の前でプレゼンテーションも行いました。来年100周年を迎える文京学院にピッタリの企画を考え、生徒全員で頑張って作り上げました。2日間、各教室に多くの方が足を運んで楽しんでくださり、嬉しかったです。皆様の心に残る充実した最高の文女祭になりました」

Photo Gallery

文女祭



幼稚園

運動会開催

10月7日、秋晴れで運動会日和の陽気の中、文京幼稚園とふじみ野幼稚園の園庭で、学年別運動会が開催されました。

文京幼稚園

今年度から、年中・年長組が合同、年少組が単学年で行う二部入れ替え制で実施しました。【年中組】●障害走●リズム「ぼくらは小さな海賊だ!」●競技（玉入れ）に出場。体操で習った種目を披露したり、声を出したり全身で表現をする姿に成長が感じられました。【年長組】●体操3種目発表●パラバルーン●リレーに出場。自分の目標に向かって頑張る姿、仲間と協調する様子は3年間の園生活での成長を感じ、多くの方が涙涙…でした。【年少組】●かけっこ●リズム「ぼくたちがどう ひとつがどう?」●親子ふれあい体操に出場。初めての運動会は楽しく、おうちの方にも子どもたちの良い所を見ていただきました。どの子ども体だけでなく、心も大きく成長していることがたくさん感じられた運動会となりました。

Photo Gallery



ふじみ野幼稚園

ふじみ野幼稚園の秋は「うんどうかい」から始まります。運動会などの行事も、幼稚園で毎日取り組むあそびを通じた学びと育ちの機会です。それぞれの学年の子どもたちが、自分たちの種目をやってみて、より楽しく、もっとできると考えていくプロセスも運動会として大切で、そうした子ども一人ひとりの姿が発揮できるように、学年ごとに実施しました。また、各学年に共通して、ダンス、親子競技、かけっこ・リレーの3つを設けました。そして、学年に応じた内容といくつもの工夫によって、音楽に合わせて動く、仲間と合わせる、考えて走って行くなど、「やって楽しい」運動会でした。さらに、今回は小1～4年の卒園した子どもたちの競技も準備し、たくさん笑顔に再会できました。今年も、子どもたち一人ひとりの頑張っていた姿に、たくさん拍手がありました。

Photo Gallery



高校

東京理科大学の
研究論文コンテストで
本校生徒7名が受賞

東京理科大学主催（共催：同大学理窓会／後援：国立研究開発法人科学技術振興機構 日本理化学協会）の「第14回 坊っちゃん科学賞研究論文コンテスト（高校部門）」に、本校理数キャリアコースの3年生7名が応募し、入賞～奨励賞まで各賞を受賞しました。

そのうち、入賞を果たしたサブリ ファティマ サキナハさん（3梅）の研究は、特に優秀な研究として、「第14回坊っちゃん科学賞作品集」に研究内容の要約の掲載が決定しました。

本コンテストは、広義の自然科学（ほぼ全ての理系分野）に関する研究を対象にしたもので、「中高校生の科学への興味・関心」を高める方策として、東京理科大学が開催するコンテストです。

今回、受賞した研究テーマと受賞内容は以下の通りです。

- 入賞「植物油は蟻を忌避できるか」（作品集への掲載）
サブリ ファティマ サキナハ（3梅）
- 佳作「強く扇ぐと警告音の鳴る扇子の開発に向けて」
安藤楓恋（3梅）・齋藤珠実（3梅）
- 佳作「インターネット犯罪から子どもを守る一つの方法
～AIを用いた手書き文字認識～」
石渡日菜（3梅）・工藤千佳（3梅）
- 奨励賞「油の種類によるアクリン濃度」
宮島莉嘉（3萩）
- 奨励賞「文化祭における教室内混雑緩和アプリの開発」
永野愛美（3梅）

受賞した生徒たちは、授業中のみならず課外の時間も費やし、特に熱心に研究活動を行ってきました。その研究の集大成がこの論文の作成で、日頃の努力が今回の受賞につながりました。入賞した生徒から、以下のコメントが寄せられました。

*** 生徒コメント ***

サブリ ファティマ サキナハ（3梅）

「坊っちゃん科学賞で入賞できて、とても嬉しい気持ちでいっぱいです。この研究を進める中で、一緒に試行錯誤し、そして私を指導してくださった内藤先生に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました」



高校

英語スピーチコンテスト開催

11月8日、「第51回英語スピーチコンテスト」が駒込キャンパスジャシーホールで開催されました。

清水直樹校長の開会挨拶後、生徒会長中西美穂さん（2萩）が英語で堂々とした開会宣言を行いました。司会は、高校2年生国際教養Sクラスに在籍する河原和香さん（2桜）、クシュキリ エレナさん（2桜）、佐野ひなねさん（2桜）が務めました。中高の学監でもある恒吉僚子グローバル担当副学長・教授をはじめ、多くの観客を前にして緊張した雰囲気の中、暗唱部門6名、スピーチ部門7名が素晴らしい発表を披露しました。審査員は、アオバジャパン・インターナショナルスクール文京キャンパス校長 Mr. Damian Rentoule、セント・ジョンズ大学教授 Ms. Betsy Johnson、本校講師 Mr. Allan Nisbet が務め、審査の結果、右の生徒が入賞しました（敬称略）。

鈴木さんは、学院創立90周年を記念して創設された、全てのコンテスト出場者の中で最も優れた発表をした生徒に贈られる「島田賞」も受賞。1位～3位入賞者に清水校長から賞状と楯が授与され、スピーチ部門1位の鈴木さんには、恒吉学監より「島田賞」のトロフィが贈られました。表彰の後、3人の審査員より今回の経験の大きさを語る講評があり、恒吉学監からの生徒を讃える挨拶で白熱した大会は終了しました。

Photo Gallery
英語スピーチコンテスト

大学

藤沢市等との産官学国際連携教育プログラム
「GLOBAL BLUEHANDS PROJECT」を今年も実施

10月15日・16日の2日間、本学と協定を結ぶ神奈川県藤沢市等との連携により、今年で2回目となる国際連携教育プログラム「GLOBAL BLUEHANDS PROJECT」が実施され、米国をはじめとする8か国の大学からの留学生と本学学生の計47名が参加しました。

今回は、昨年に引き続き、藤沢市在住で日本文化を新たな形で世界に発信している藍左師・守谷玲太氏（株式会社アートモリヤ）ご協力のもと、藤沢市を舞台に、世界に誇れるサステナブルな伝統工芸「藍染」の体験に加え、水墨画やお囃子、神輿体験、書道パフォーマンスの見学、さらに、藤沢市藤澤浮世絵館での浮世絵の鑑賞と刷り体験も実施されました。また、2日目に行われた江の島フィールドワークでは、「湘南キャンドル2023」イベントのキャンドル着火体験にも参加し、夜の江の島を淡いキャンドルの光の海で彩りました。

留学生たちは事前学習で藤沢市の歴史や観光並びに、藍・藍染めに関する基本知識を学び、現地フィールドワークを通して、日本の伝統工芸や美術・歴史についての理解を深めるとともに、日本文化を多角的な視点から学びました。

また、11月13日、本プロジェクトの成果報告会が藤沢市役所にて実施されました。

本プロジェクト終了後、留学生たちはそれぞれが感じた藤沢市の魅力や印象に残ったシーンなどを各自ショート動画にまとめ、Instagram (bgu_globalbluehandsprojectアカウントなど) で共通のハッシュタグを付けて発信してきました。

報告会当日は、藤沢市の宮治正志副市長のほか藤沢市関係者に向けて、留学生19名が自ら制作・発信した動画を披露し、そこに込めた想いやメッセージを一人ひとり日本語で発表しました。

さらに、人間学部心理学科の小林剛史教授が、留学生に対して行ったアンケートを定量的に分析し、本プロジェクト体験後のサステナビリティ意識への影響や心理的变化などの面から本プログラムの成果と考察の報告も行われました。

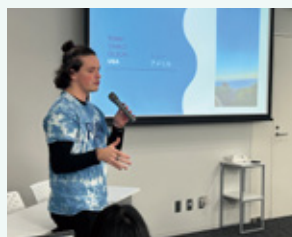
今後も本学は藤沢市との連携を維持・強化し、様々なプログラムを展開していきます。



江の島フィールドワークでの集合写真



水墨画に挑戦する留学生



報告会で藤沢市の印象を語る留学生



白旗神社で神輿を担ぐ留学生たち



藍染体験をする留学生



庄巻の書道パフォーマンス



江の島でのキャンドル着火体験



藤沢市役所での報告会にて